



トマト



**ネマキック粒剤で
「トマトの根張りよく、大玉傾向に」
ハウス栽培でも、鋭く、長い効果**

千葉県九十九里町 **川島章さん**〈トマト〉 2013年

全国屈指のトマト産地、千葉県。食味にこだわって、桃太郎系統の品種のみをハウス栽培・出荷する九十九里町の川島章さん(取材当時48)は、線虫防除のために「ネマキック粒剤」を使い始めた。川島さんは**「収穫後に根を見ると、より正常な形になっている。根張りがしっかりしているせいか、少し大玉傾向になってきた」と話す。**

川島さんは「桃太郎グランデ」や「CF桃太郎ファイト」を栽培する全30アールで「ネマキック粒剤」を使用する。土壤消毒剤の「D-D剤」を処理し、ガス抜き後、定植直前に処理する粒状線虫防除剤を、全面的に「ネマキック粒剤」に切替えた。より効果的な線虫防除をめざして、新成分を試そうと、その前作で10アールに使ったところ、**「根の状態が良くなり、効果を実感できた」**からだ。

一般的に線虫は地温が上がると活動が活発化する。川島さんは抑制トマトの場合、気温の高い定植期の8月上旬に効果を得たいところ。逆に春トマトの場合は、3月下旬の定植時期は地温がまだ低く、6月中・下旬の出荷ピークごろまで線虫を抑え込みたい。現状は、**「D-D剤」により落ちた線虫密度を「ネマキック粒剤」で低く抑えることが出来ており、鋭い効き目や優れた残効性を実感している。**

川島さんは特に根の形状の変化に着目。**「こぶの発生が抑えられ、根がすっと伸びる」と**話し、トマトが大玉傾向になってきたことから、これまでより根が養分を吸えていると推測。「土づくりをした結果が、生育後半にもきちんと出るようになるのではないかと期待する。

線虫密度が高くなりがちなハウス栽培である上に、春トマトの前には冬キュウリを栽培し、土壤消毒剤を使いづらい圃場の隅などの一部では「ネマキック粒剤」のみの処理で対応する。そうした使用での確かな効果に、川島さんは「今後も使用していく」と話し、部会員の間でも使用者が増えているという。

